

## <研究ノート>

# 介護福祉士養成課程における外国人留学生の介護実習(実習区分Ⅰ) －円滑で効果的な在り方の検討－

小田 栄子

## Care Practice of Foreign Students in Certified Care Worker Training Programs (Practice Classification I) － Study of Smooth and Effective Care Practice Method －

Eiko ODA

This paper discusses the result of conducting an interview survey of 3 foreign students and 3 practice trainers in order to study of smooth and effective care practice method of accepting foreign students into care practice (practice classification I) in the certified care worker training courses. As the result, it revealed the importance of motivations of foreign students for the practice. Also, a certain level of communication skills and a provision of practice environments taking into consideration their relationships with Japanese trainees are required for foreign students to receive an effective care practice training. Also, the result indicated the necessity to consider the practice records and assessments as the future challenges.

**Key words** : foreign students, nursing care practice, practice classification I, the certified care worker training courses

外国人留学生、介護実習、実習区分Ⅰ、介護福祉士養成課程

### 1. 研究の背景

少子高齢化による人口減少に伴う労働力不足、超高齢社会に突入した我が国における慢性的な介護人材不足は、深刻な社会問題となっている。この様な中、介護分野の人材確保に向けて、日本で介護福祉士の国家資格を取得した外国人が国内で働けるよう、在留資格<sup>注1</sup>に「介護」を加える「出入国管理及び難民認定法の一部を改正する法律案」が、平成28年11月18日、第192回国会で可決成立した。これにより、介護福祉士養成校に入学する外国人留学生の増加が予想される<sup>注2</sup>。

介護福祉士養成施設協会が、各養成校の平

成27年度の入学者の状況について調査を実施した。回答のあった379養成課程の定員に対する充足率は50%（離職者訓練による受入れを除くと40.8%）であった。これは離職者訓練生の受入れがなかった20年度の45.8%に次ぐもので、非常に厳しい状況であるとしている<sup>1)</sup>。高校生人口の減少のみならず、若者の福祉離れの影響が大きい。

一方、厚生労働省はこれまで、介護福祉士養成校卒業と同時に付与されてきた介護福祉士国家資格を、介護福祉士の資質向上を図る観点から、一定の教育課程を経た後に国家試験を受験するという形で、資格の取得方法を一元化する方針を打ち出し<sup>2)</sup>、平成29(2017)

年度からの実施を予定している。

国は、介護分野の量的人材確保のために外国人留学生を受け入れながらも、一方で、質の維持向上のために、介護福祉士国家資格取得のハードルを高く設定しようとしているのである。したがって、今後介護福祉士養成校に求められる役割は、日本人学生のみならず、外国人留学生に対する国家資格取得への確実な教育力であると言える。

## 2. 研究の目的

介護福祉士養成課程1,800以上の時間の内、介護実習は450時間以上と規定されている。介護実習は机上の学習と現場の介護実践を統合させる体験としてその意義は大きい。また、介護実習における現場体験は、資格取得に向けたモチベーションに大きく影響しており、入学当初の志を維持し、資格取得のに向けた困難を乗り越える原動力にするためには、介護実習の充実が不可欠であると言える。しかし、介護福祉士養成校における外国人留学生の介護実習に焦点を当てた研究は未だ発表されていない<sup>注3</sup>。

そこで本研究では、介護福祉士養成課程における外国人留学生の介護実習(実習区分Ⅰ)の実際を明らかにし、相互にとって円滑で効果的な介護実習の在り方を示唆することを目的とした。

## 3. 介護実習プログラム

### 1) 介護福祉士養成課程における介護実習の概要

介護福祉士養成課程における介護実習について、厚生労働省が規定している概要<sup>3)</sup>を記す。その内容は、介護実習のねらいに即して、「実習区分Ⅰ」と「実習区分Ⅱ」に分け

られており、それぞれの趣旨に即した基準が設定されている。

これからの社会では介護サービスにおいて、利用者一人ひとりの個性や生活リズムを尊重した介護(個別ケア)の実践が必要とされる。そのため、実習生は「実習区分Ⅰ」で介護現場の多様性を理解するため、様々な種類のサービスを体験し、「実習区分Ⅱ」では個別ケアを理解するため、一定期間以上継続して実習を行い、一連の介護過程の展開<sup>注2</sup>を実践する。以上のような規定と基準に照らして、各養成校はそれぞれに独自の介護実習プログラムを組んでいる。

### 2) A福祉系大学における介護実習の概要

A福祉系大学では表1に示すように、介護実習を1年次から3年次にかけて実施し、第1段階実習、第2段階実習、第3段階実習としている。第1段階と第2段階実習が「実習区分Ⅰ」、第3段階実習が「実習区分Ⅱ」にあたる。また、それぞれの段階に応じて、実習到達目標が掲げられている。

## 4. 研究方法

### 1) 調査対象

介護福祉士養成校であるA福祉系大学に在籍し、初めての介護実習(第1段階実習)を終えた外国人留学生(以下、留学生)3名と、その実習を受け入れた施設の実習指導者(以下、指導者)3名とした。

留学生は、いずれも20代女性でアジア2カ国、1地域からの留学である。大学入学前には日本語学校に1~2年間在籍し、表2で示すように、日本語能力検定<sup>注5</sup>N1取得または、N2相当のコミュニケーション能力がある。実習開始時の来日期間は2年10ヶ月~3年10ヶ月である。また、「介護」が在留資格になれば、介護福祉士として日本での就労を

表1 A福祉系大学における介護実習の概要

区分	実習区分Ⅰ		実習区分Ⅱ
名称	第1段階実習	第2段階実習	第3段階実習
学年	1年	2年	3年
内容	施設12日間	地域密着型3日間 居宅3日間 施設17日間	施設25日間
主な目標	利用者理解のためのコミュニケーション、基本的な生活支援技術の確認	多様な介護サービスの理解、利用者ニーズのアセスメント、生活支援技術の個別性理解	一連の介護過程の実践、多職種連携における介護福祉士の役割理解

希望し、いずれはその経験を母国の介護福祉発展のために活かしたいと考えている。

留学生の実習先は、A福祉系大学が実習契約している特別養護老人ホーム2施設と、介護老人保健施設1施設である。指導者は介護現場で留学生に直接介護技術指導を行ったり、直接指導をした他の職員から情報を得ながら実習日誌を通して指導を行ったりした者である。いずれも介護福祉士実習指導者研修課程<sup>注6</sup>修了者で、長年介護実習生の受け入れを経験しているが、介護実習生として留学

生を受け入れたのは今回が初めてである。ただし、3施設のうち1施設については現在、外国人（配偶者が日本人）1名を介護職員として採用しており、介護現場に留学生アルバイトの受け入れも行っている。

## 2) 調査時期

第1段階実習は2016年2月22日～2016年3月10日に実施された。留学生、指導者それぞれに、実習終了の翌週である2016年3月14日～18日に調査を実施した。

表2 日本語能力試験 認定の目安

<b>【N1】</b> 幅広い場面で使われる日本語を理解することができる。	
読解	・幅広い話題について書かれた新聞の論説、評論など、論理的にやや複雑な文章や抽象度の高い文章などを読んで、文章の構成や内容を理解することができる。 ・様々な話題の内容に深みのある読み物を読んで、話の流れや詳細な表現意図を理解することができる。
聴解	幅広い場面において自然なスピードの、まとまりのある会話やニュース、講義を聞いて、話の流れや内容、登場人物の関係や内容の論理構成などを詳細に理解したり、要旨を把握したりすることができる。
<b>【N2】</b> 日常的な場面で使われる日本語の理解に加え、より幅広い場面で使われる日本語をある程度理解することができる。	
読解	・幅広い話題について書かれた新聞や雑誌の記事・解説、平易な評論など、論旨が明快な文章を読んで文章の内容を理解することができる。 ・一般的な話題に関する読み物を読んで、話の流れや表現意図を理解することができる。
聴解	日常的な場面に加えて幅広い場面で、自然に近いスピードの、まとまりのある会話やニュースを聞いて話の流れや内容、登場人物の関係を理解したり、要旨を把握したりすることができる。

<出典> 日本能力試験HP <http://www.jlpt.jp/about/purpose.html>  
\* N1～N5まであるレベルのN1、N2のみ抜粋

### 3) 調査方法

#### 【留学生インタビュー】

半構造化面接をグループインタビューにて実施した。インタビューは対象者の承諾を得て、ICレコーダーに録音をした。インタビューは筆者の研究室で実施し、インタビュー時間は約40分であった。

#### 【指導者インタビュー】

半構造化面接を実施した。インタビューは対象者の承諾を得て、ICレコーダーに録音をした。インタビューは筆者が各施設を訪ね実施し、インタビュー時間はそれぞれ約30分であった。

### 4) 調査項目

大まかな調査項目を設定し、質問を行った。留学生には、実習の感想をこちらからの質問で限定しないよう、指導者への質問の仕方とは表現を変えている。その項目は次のとおりである。

#### 【留学生インタビュー】

①実習の感想 ②実習中楽しかったこと・嬉しかったこと ③実習中困ったこと・大変だったこと（コミュニケーション・記録）④外国人としての戸惑い ⑤実習を終えて介護福祉士資格取得に対する意欲の変化 ⑥今後の実習に対する要望、以上6項目とした。

#### 【指導者インタビュー】

①外国人受け入れ実績 ②日本人実習生と比較して配慮の違いを感じたか（4件法：違いを強く感じた・違いを多少感じた・違いは殆ど感じなかった・違いは感じなかった）③留学生の印象 ④コミュニケーション・記録について ⑤留学生の文化・風習の違いや違和感 ⑥今後の受け入れに対する養成校への要望、以上6項目とした。

### 5) 分析方法

本研究は、質的記述的研究で分析を行った。質的記述的研究は理論をつくり出すことを目

的にするのではなく、研究対象となっている現象を内部者の視点から現実を明らかにすることによって、その現象を理解することを目的とするものである<sup>4)</sup>。したがって、まだ明らかにされていない留学生の介護実習という現象をとらえた、本調査の分析に有効であると考えたからである。

まず、ICレコーダーに録音したデータを逐語録に起こし、コード化を行った。次にコードを分類しカテゴリー化を図り、その関連を検討し図式化した。

### 6) 倫理的配慮

留学生には、答えたくない質問に答える必要はないこと、個人の特定がされないように配慮すること、知り得た情報は目的以外に使用しないことについて明記した文書を準備し、日本語能力に配慮し、文書を指し示しながら口頭で説明を行い承諾を得た。

指導者には、事前電話にて調査目的と大まかな質問内容を説明し、同意を得たのちに文書でも調査依頼を行った。依頼書の中に、個人情報保護、得られた情報を研究目的以外に使用しないことを明記し、インタビュー前に口頭でも説明した。

また、本研究の留学生、指導者に対する調査については、神戸医療福祉大学倫理審査委員会の承認を得ている。

## 5. 結果

データを逐語録に起こした結果、指導者109コード、留学生81コードを抽出した。利用者、実習メンバーには直接インタビューを実施していないため、指導者や留学生が捉えた利用者、実習メンバーの記述をコード化した。計190のコードは意味の類似性で分類し、23のサブカテゴリーと6つのカテゴリーを抽出した。6つのカテゴリーは①意識 ②コ

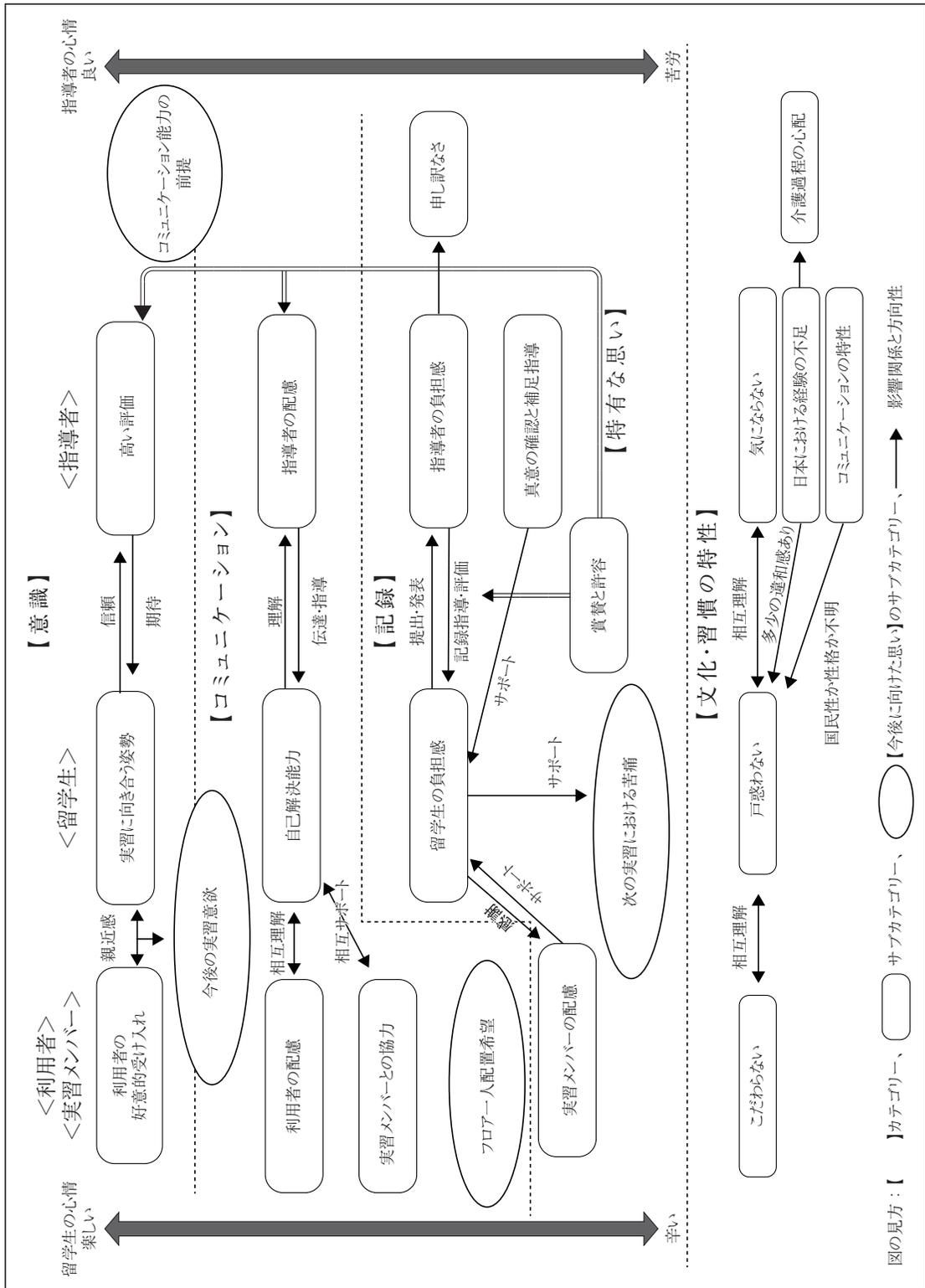


図1 介護実習現場における相関図

表3 カテゴリー化に至った主なコード

カテゴリー	発言者	サブカテゴリー	主なコード
意識	指導者	高い評価	ほかの実習生以上に意欲的 積極的で一生懸命 特に何も言うことがないくらい頑張ってくれた
	留学生	実習に向き合う姿勢	死ぬほど頑張った 現場は楽しかった 職員みんな優しくあった 安心できた
	留学生	利用者の好意的受け入れ	利用者とのコミュニケーションがすごく楽しかった 利用者とのコミュニケーションはぐっときた、感動した、心が温かくなった 全然本当に何も違和感はなかった 12日間で仲良くなった
	指導者 留学生	指導者の配慮	日本人の若い人にもわからないような方言がわからずどうやうて伝えたらよいかと思った 表情で八日（ようか）が通じなかったことがわかり言い換えた 外国人だからゆっくり説明してくれた 専門用語以外でもわからない言葉を説明してもらった
コミュニケーション	留学生	自己解決能力	言葉の壁はあまりない わからないことは職員に聞いて教えてもらおう 聞き取れなかったことは他のメンバーに聞いた 高齢者の昔の言葉や関西弁がわからなくても笑顔で返事していた 知らない言葉や方言は文脈でなんとなくわかる 関西弁はよくわからない言葉だが何日かするとわかる
	留学生	利用者の配慮	利用者の話が理解できず返事をしなかつたら確認してくれる 昔先生をやっていた利用者は私に理解させようとして英語で喋ってくれて助かった 良い言葉や悪い言葉を教えてもらった
	留学生	実習メンバーとの協力	メンバーの姿を見て自分もこういうことができるかもしれないと思えた メンバーで一番大事なのは情報交換だと思ふ 12日間をどうこなしていくかお互い助け合いながらできた
	指導者	指導者の負担感	一番大変だったのが記録 書いていることを読み取るのに時間がかかった この書き方では取り違いをして理解している
記録	指導者	真意の確認と補足指導	伝わりにくい部分を一緒に読みながら確認した 職員の子が関わりを持って教えた 記録から昨日指導したことを理解しているのか考えて、追加でメモを渡したりした
	指導者	申し訳なさ	言葉を補足して説明してもらっても理解できず申し訳なかった 意図している内容が理解できずごめんね 本当は別のことを言いたかったのかかもしれない

記録	留学生	留学生の負担感	(びっくりしたり) 日記、多すぎる 報告や色々なことを書くことがしんどかった 毎日日誌にして書くのは辛い、もう泣きながら書いている 時間がかかって睡眠時間が足りない
	留学生	実習メンバーのサポート	メンバーに（表現を）教えてもらいながら書いた 日記を一緒に書くときに漢字を直してもらった
	指導者	気にならない	特に気になることはなかった
	指導者	日本における経験の不足	レクやおやつなどのときに歌う昔の歌（童謡）がわからなかった 彼女（留学生）はみんな順番に食べ始めるのではなく行儀良く待つべきという考え
	指導者	介護過程の心配	日本人の文化の理解が必要 情報からどのように分析していくか、中国人の文化や生活習慣が反映されてくるのではない
	指導者	コミュニケーションの特性	初対面の人に対し、日本人はある程度沈黙がある距離のとおり方をすることがそれがない 言葉の切り方がリズム的にきつく聞こえてしまう
	留学生	戸惑わない	特に気になることはなかった
	指導者	こだわらない（利用者）	利用者が戦争体験を話していたがどうということはない 「うちの娘はアメリカにおるんやで」と言っていた利用者もいた ずっとエリアの中に入って行って行っていたので利用者のこだわりもなかった
	指導者	賞賛	「私外国人ですよ」というと「あ～そうなん」と言われ、次の日に「あんた誰？」と言われる すごいなどと職員間で話した 想像していたよりも意思疎通が出来ていた もし自分たちが海外に行ったら実習日記を書くことになったらここまで書けない 結構難しい言葉を使いながら専門用語も書いていた
	指導者	許容	日本語能力の差と思い甘い甘めに見ていた 外国人だからという先入観があった 何回もやったらわかることだと思っから深く言わなかった
今後の実習に向けた思い	指導者	コミュニケーション能力の前提	コミュニケーションや記録面での日本語力とか表現力が必要 一生懸命書いてくれない私たちが理解できないと困る 介護技術を指導するにあたり必要なコミュニケーションが図れる必要がある
	留学生	今後の実習意欲	次の実習も行きたい もうちょっと上手くやりたい ちゃんとやり遂げたい やれるところまで頑張りたい
	留学生	フロア一人配置希望	日本人にはわかって自分だけがわからない時に質問しにくい 友達がわかっていないことを質問すると面倒くさいと思われる 自分には分からないことが多いので、質問ばかりすると、他の実習生より目立ってしまう 一人なら丁寧に教えてもらえ
	留学生	次の実習に対する苦痛	実習日記がなかったら実習を一年でも続けたい 日記がなかったら行く

コミュニケーション ③記録 ④文化・習慣の特性 ⑤特有な思い ⑥今後の実習に向けた思い、であった。そのそれぞれのカテゴリーで、留学生、指導者、利用者、実習メンバーの相関を整理し、図1のように図式化した。また、カテゴリー化に至った主なコードを表3で示した。

### 1) 抽出されたカテゴリー

以下、相関図(図1)と主なコード(表3)を元に説明する。【 】はカテゴリー、『 』はサブカテゴリー、< >は影響関係、「 」はコードを示す。

#### 【意識】

「日本人実習生と比較して配慮の違いを感じたか」の4件法の質問に対しては、2名の指導者が「違いを多少感じた」とし、1名の指導者が「違いは殆ど感じなかった」とした。利用者は他の日本人実習生と変わらず『好意的な受け入れ』であった。それに対し留学生は利用者にと親近感を抱いており、その感覚は「感動」「心が温かくなった」と実習を振り返り「楽しかった」と評価する要因となっていた。

指導者は、留学生を「積極的で一生懸命」「日本人実習生よりも意欲的」と『実習に向き合う姿勢』を『高く評価』していた。留学生は指導者から受ける<期待>を感じ、「やさしかった」「安心できた」と指導者に対する<信頼>を示した。留学生は、「実習は良かった」

「現場は楽しかった」「死ぬほど頑張った」と話し、充実した実習であったことを語った。

#### 【コミュニケーション】

留学生自身は、利用者や指導者とのコミュニケーションに関し、「言葉の壁は余り感じない」と語った。「わからないことは職員に聞いて教えてもらう」「聞き取れなかったことは他のメンバーに聞く」ことや、「わからなくても笑顔で返事していた」「方言は文脈でなんとなくわかる」という方法で、『自己解決』できていた。利用者は留学生の反応を見ながら「理解できたか確認」や「英語による言い換え」を行い、指導者は「ゆっくり話す」「方言も含めた言葉の言い換え」を行うといった『配慮』を実践していた。実習メンバーとの「情報交換」による学びも大きく、それにより自らの実習が充実したと語っている。

#### 【記録】

実習生が実習中に提出しなければならない記録は、表4に示したように6種類ある。その内、カンファレンス資料については<提出・発表>することが求められる。

留学生から記録について、その『負担感』を示すものとして「報告や色々なことを書くことがしんどかった」「毎日提出するのが辛い」と語り、思うように書けないことから「時間がかかって睡眠時間が足りない」と訴えがあった。指導者からも、記録指導についてその『負担感』が語られた。「読み取りに時間

表4 A福祉系大学 第1段階実習中に提出すべき記録一覧

種 類 (用紙サイズ)		内 容	枚 数
手 書 き	施設概要 (A3)	施設の概要を記入する	1
	実習日誌 (A3)	一日の実習内容と考察を記入し、翌朝提出する	12
	プロセスレコード (A3)	利用者とのコミュニケーションの逐語録を分析する(2事例)	2
	利用者生活歴シート (A4)	利用者の生活歴を記入する	1
	利用者情報シート (A4)	利用者のADL(日常生活動作)、病歴などを記入する	1
PC	カンファレンス資料 (A4)	実習終了時に施設で実施される反省会用資料	2枚以内

がかかった」「留学生がそれをどのような思いや考えで書いているのか、呼び出して『真意を確認』する必要があった」また、指導したことが上手く伝わっておらず、日誌の指導者コメント欄だけでは足りないため、「追加指導をメモにして渡す」といった『補足指導』の必要もあった。その苦勞の影に、留学生に対し意図した内容を理解できず、『申し訳ない』といった気持ちを表す言葉も聞かれた。

留学生は、指導者からのフォロー以外にも、実習メンバーからのフォローも受けている。「日誌を書くときに漢字を直してもらった」「メンバーに（表現を）教えてもらいながら書いた」とメンバーの存在に＜感謝＞している。

#### 【文化・習慣の特性】

介護実習では、その期間中、レクリエーションやクラブ活動などの参加機会がある。今回の実習では、おはぎ作りに参加したり、みんなで一緒に歌を歌うといったレクリエーションに参加したりしていた。

留学生は『戸惑い』は感じておらず、利用者も指導者の観察によると、『こだわりはなかった』ようである。自己紹介をしても「次の日に、あんた誰？と言われる」と利用者の記銘力低下が見られたり、「娘がアメリカにいる」といった、社会のグローバル化による影響があげられた。

指導者は、概ね『特に気になることはなかった』としながらも、いくつかのエピソードがあがった。「レクリエーションで昔の童謡や唱歌を歌ったときに歌えなかった」「料理レクで出来た人から食べていっていたら、同じテーブルの利用者のおはぎが全部揃うまで食べるのを待つように利用者を制して、上手く制することができず、どうしたら良いかと日誌に書いてあった」という内容であった。全員の料理が揃ってから食べることを重要視

する習慣は、利用者の状況を理解し、指導により納得できたという。積極的なコミュニケーションの図り方について、「初対面の人に対し、日本人はある程度沈黙がある距離のとり方をするがそれがない」「言葉の切り方がリズム的にきつく聞こえてしまう」といった内容が語られた。しかし、『コミュニケーションの特性』については＜国民性なのか性格なのか判断できない＞という意見があった。

#### 【特有な思い】

意識、コミュニケーション、記録のそれぞれのカテゴリーにおいて、指導者は特有な思いを抱いていることが分かった。その思いとは、「すごいよなああと職員間で話した」「想像していたよりも意思疎通ができた」「もし、自分が海外に行って実習日誌を書くことになったらここまで書けない」といった『賞賛』と、「外国人だからという先入観があった」「日本語能力の差と思い甘めにみた」「何回もやったらわかることだから深く言わなかった」といった『許容』であった。

#### 【今後の実習に向けた思い】

今後の実習に対する要望についての問いかけに対し、実習メンバーのサポートに感謝しながらも『フロア配置は一人が良い』と希望があった。また、指導者からは『ある程度のコミュニケーション能力が必要』との要望があった。今後の実習に対する意欲を尋ねると「日誌がなかったら一年でも実習を続けたい」「日誌がなければ実習に行く」と言う程、実習において記録の負担感は大きく、そのことが『次の実習に対する苦痛』になっていることが語られた。

#### 2) 分析結果の妥当性の検討

分析結果の妥当性の検討のため、メンバーチェックを実施した。本調査の協力者である、指導者3名と留学生3名に個別に説明

を行い、データの解釈が妥当であるか、相関図に納得できるかについて確認した。その結果、6名全員から納得を得られた。

## 6. 考察

### 1) 留学生の介護実習（実習区分Ⅰ）の実際

今回の留学生3名については、高いコミュニケーション力があつたため、留学生自身が自己解決できる力があつた。そのため、コミュニケーション場面に対し周囲が行つた配慮は、特に負担を感じるものではなかつた。留学生は、周囲からの配慮を好意的に感じ、利用者への親近感や指導者に対する信頼感を抱けたことで、介護実習の中に楽しさや喜びを見出すことができていた。このことが次の実習への意欲にも繋がっており、介護実習によって資格取得に対する意欲が高まつたと言える。

一方、記録については、留学生、指導者共に負担感の大きなものであつたことが明らかになつた。言語能力とはコミュニケーション能力だけでなく、聴解や読解、記述といった能力が含まれる<sup>5)</sup>が、読み手に意味が通じる記述をすることは相当な労力が必要であることは想像に難くない。日本語特有の、漢字、平仮名、カタカナを駆使して記述することは、内容の吟味に至る前に、指導者が読み取れる字を書けるかどうかという次元からの問題である。記録の負担感は留学生に資格取得の気持ちを萎えさせるほどの影響があると同時に、指導者に留学生に対する申し訳なさまで引き出すものであつた。

指導者にこのような感情を引き出させた背景には、留学生の実習に向き合う高い意欲に対し、日誌などの記録に書かれた疑問や思いに対して、十分に応えることができていないのではないかという思いがあると考えられ

る。このことは、日本人実習生には抱かない思いであろう。

指導者の留学生に対する評価について、日本人留学生にはない特有な思いが他にもあることが明らかになつた。それは、『賞賛と許容』である。賞賛は、日本人の若者でも志す人が少ない介護を、異国の地で学ぼうとする留学生に対する思いであり、それに対し、通じにくい言葉があつたり、文章表現力がなかつたりすることは仕方ないといった許容も同時に持ち合わせていた。この『賞賛と許容』は、意欲、コミュニケーション、記録の全てのカテゴリーに影響していることが分かつた。このことについては、後の養成校の課題で述べることとする。

ここで、記録の場面では、日本人実習生にはない独特の大きな負担感があつたにも関わらず、留学生受け入れの印象として「違いを強く感じた」とする指導者がいなかつた理由について考察する。

介護福祉士は、社会福祉士及び介護福祉士法において、「専門的知識及び技術をもって、身体上又は精神上の障害があることにより日常生活を営むのに支障がある者につき心身の状況に応じた介護を行い…」と定められており、日常生活の支援がその役割である。そのためには、支援の対象者が生まれ育つた環境や、文化や習慣、それに基づく価値観に対する理解が求められる。その点において、利用者や指導者は留学生に対し余り違和感がなく、留学生自身も戸惑いがなかつたという。このことから、外国人であることによる文化や習慣面での知識、経験の不足は日常生活の支援を行うにあたり、致命的なことではないことが分かる。それは、理解しようという意欲と努力によって補えるものであり、その姿勢こそがどの実習生においても、さらに、介護福祉士に求められるものであると考えられ

る。

留学生の実習に向かう姿勢によって、指導者は、留学生を介護実習で受け入れることで強えられる、コミュニケーションや記録における特別な配慮に対する負担感を軽減、払拭されていた。このことから、改めて実習や介護に向き合おうとする意欲の重要性が示唆された。

## 2) 円滑で効果的な介護実習のあり方

今後の実習における養成校への要望として、留学生から「フロア配置は一人がよい」という言葉が出たことは意外であった。教員としては、留学生の言葉の壁を解消するために、学校生活で気心の知れた実習メンバーのフォローが必要で、それを留学生も望んでいると考えていたからである。

介護実習は1施設に対し、実習生2～3名で実習を行っている。施設内における実習生のフロア配置は各施設の構造や職員体制によって異なる。今回の実習では、2名の留学生についてはユニット型（利用者10名程度）フロアへの一人配置であったが、1名の留学生は、従来型（利用者20～30名程度）フロアで他の実習メンバー2名と同じ配置であった。

フロア配置がバラバラであっても、毎日実習時間終了前の30分間は学生カンファレンスの時間を持ち、実習生が集まりその日一日の様子を情報共有したり記録をしたりする時間になっている。

留学生は他の実習メンバーとの情報交換は重要と考え、それにより自身の実習が助けられ、高められているというメリットは実感しているものの、他の実習メンバーが同じフロアにいることのデメリットも感じている。一緒に指導を受けた場合、「日本人にはわかって自分だけがわからない時に質問しにくい」、「自分には分からないことが多いので、質問

ばかりすると、他の実習生より目立ってしまう」、「一人なら丁寧に教えてもらえる」という発言があった。このことから、同じ実習生でありながら、外国人であることの不利益が、日本人と同じ空間にいることによってかえって助長されることへの危惧が明らかになった。

留学生は、外国人としての不利益を自己解決できる手立てを持っており、その手立てに必要な時に、留学生自身が実習メンバーの助けを求めることができる環境が望まれる。そして、留学生が外国人としての不利益を自己解決するためには、指導者も要望としてあげている、「ある程度のコミュニケーション能力」が大前提にあると言える。

## 3) 養成校の課題

今後、留学生が介護実習を行うにあたり、実習生を送り出す養成校が検討すべき課題として二つのことがあげられる。一つは記録である。その種類、量の多さによる負担感は、留学生のみならず日本人実習生においても同様である。柴原（2005）が述べているように、実習生にとって毎日の記録は、書けない、まとめられない、時間がかかる、負担であるというものであり、その背景として、基礎教育の中で本や新聞を読むことや書く経験が少なく、情報収集は視覚、聴覚を通して行われることが多い世代である<sup>6)</sup>ことがあげられている。日本人実習生ですら、記録の負担感から資格取得の意欲を喪失したり、記録内容が不十分なために実習単位が与えられないケースが増えてきている。

実際、介護現場における記録は、個別ケアやチームケアを行う上で重要なものであり、記録なしにはケアは成り立たない。しかし、毎日、A3用紙1枚を8割以上埋めなければならぬほどの量の記録は課せられない。また、パソコン入力による記録管理が主流に

なっている。今後の課題として、実習記録の様式や量についての検討や、手書きにこだわらないパソコン活用の方向性について検討する必要があると考える。

二つ目として、評価の問題があげられる。今回の調査で、指導者は留学生に対し、「賞賛と許容」という、特有な思いを抱く傾向があることが明らかになった。これにより、養成校の単位認定として介護実習の成績評価を行う際、日本人実習生と同じ基準で評価をすることの正当性が危惧される。

評価を行う判断基準は、公平公正で国家資格を得るための介護実習としての妥当性のあるものでなければならない。その判断において求められることは、介護福祉士に必要なものとして構成される様々な要素が、優先順位をもって評価されなければならないということである。「介護に意欲を持って臨める」ということと、「記録が書けない」ということが、評価点数上で相殺されてはならない。実習生が日本人であっても外国人であっても平等性が保たれ、国家資格を得るにふさわしい人材かどうかを正しく評価されるための評価基準を養成校は今後、整えていく必要がある。

## 7. まとめ

外国人留学生の在留資格として「介護」が加えられようとしている今、介護福祉士養成課程における介護実習の留学生受け入れ実態の分析は有用であったと考える。介護実習現場における留学生の実習意欲は、指導者にかける特有の負担を払拭するものであった。また、利用者との関係において、文化や習慣に対する知識や経験の欠如は補い可能であり、その点において外国人であることの不利益は双方に感じられなかった。

今後、円滑で効果的な介護実習を行うため

には、ある程度のコミュニケーション能力の前提と、日本人実習生との関係性に配慮した実習環境の提供が求められる。また、課題として記録と評価における検討の必要性が示唆された。

## 8. 研究の限界と今後の課題

今回の調査は、実習区分Ⅰという基礎的な実習に対する調査であった。今後、留学生が実習区分Ⅱで介護過程の全てを実践することになった場合、今回の調査では明らかにならなかった実態や課題が表出することが予想される。留学生の介護実習の実態を明らかにするためには、今後も調査を継続していく必要がある。

留学生に焦点をあてた本研究を進めるにつれ、最終的には、社会の要請に応じて介護福祉士養成校がどのような人材を輩出すべきかが問われていることに行き着いた。介護福祉士を目指す世代や背景の特性を理解し、柔軟に教育方法を検討する一方、介護を担う人材育成において本質的で普遍的なものを教育することが、介護福祉士養成校に求められている。

## 謝辞

本調査にご協力くださいました、実習施設指導者の皆様、留学生の皆様へ深く感謝いたします。

## <注釈>

注1 在留資格の取得とは、日本国籍の離脱や出生その他の事由により入管法に定める上陸の手続を経ることなく我が国に在留することとなる外国人が、その事由が生じた日から引き続き60日を超えて我が国に在留しようとする場合に必要とされる在留の許

可である。

入国管理局 HP :

<http://www.immi-moj.go.jp/tetuduki/kanri/qaq5.html> アクセス 2016.10.30

注2 介護福祉士養成施設の留学生の状況

回答のあった養成校291校のうち、留学生受け入れを実施している学校は66校で、入学者数は、平成23年34名、平成24年24名、平成25年73名、平成26年59名であった。

第5回外国人介護人材受入れの在り方に関する検討会（平成27年1月8日）田中博一構成員提出資料

注3 国立国家図書館サーチで検索したところ、該当する論文は見当たらなかった。

<http://iss.ndl.go.jp/>

注4 介護過程の展開とは、利用者の情報収集、アセスメント、介護計画立案、実践、評価という一連の流れのことである。

注5 日本語能力検定とは、原則として日本語を母語としない人を対象に、日本語能力を測定し、認定することを目的として、国際交流基金と日本国際教育支援協会が共催で実施している。

日本能力試験 HP : <http://www.jlpt.jp/about/purpose.html>

注6 介護福祉士実習指導者研修課程とは、質の高い実習教育確保のために平成21年度より開始されたもので、平成24年度より実習区分Ⅱ受け入れ施設指導者には研修が義務付けられた。

[http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12201000-Shakaiengokyokushougaihofenfu-kushibu-Kikakuka/siryoul\\_6.pdf](http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12201000-Shakaiengokyokushougaihofenfu-kushibu-Kikakuka/siryoul_6.pdf)

3) 兵庫県介護福祉士養成校連絡協議会：介護福祉実習プログラム . 4-5, 2009

4) グレグ美鈴, 麻原きよみ, 横山美江：よくわかる質的研究の進め方・まとめ方 . 54,56-57, 医誌薬出版, 2014

5) 大西博子：言語能力はいかにして評価すべきか ACTFL - OPIにおける言語能力観の分析と考察をとおして .17, 言語文化教育研究 vol.4, 2006

6) 柴原君江：介護福祉実習における記録指導の課題 . 2, 人間福祉研究 第8号, 2005

<参考文献>

西条剛央：ライブ講義 質的研究とは何か . 新曜社, 2008

藤江慎二、西尾孝司：介護支援専門員が虐待の有無の判断に迷うプロセス . 介護福祉学 vol.20, 2013

<引用文献>

1) 介護福祉士養成施設協会：介養協 News. 27No3, 1, 2015.9

2) 厚生労働省：「第3回福祉人材確保対策検討会（平成26年7月1日）資料1」アクセス2015.9.11